
さつき

しん太

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

さつき

【コード】

N0287E

【作者名】

しん太

【あらすじ】

二十八歳になったさつきには得体の知れない孤独感がまとわりついていた。夜の街の中、車を走らせていたさつきだが。

(前書き)

宜しく願います。

さつき

さつきは夜の街並みの中、一人で赤いベントンを走らせていた。ハンドルを握る手は何だか疲れていて、前を見つめる目も何だか渴いていた。さつきは夜の闇を切り裂く様にアクセルを踏み、どんどんスピードを上げていく。無数の光が彼女に迫り、流れ去っていく。

巨大なビル達が彼女を見下ろしている様だった。「何をそんなに急いでいるんだい」とでも言う様に。空に浮かぶ満月も何だかさつきのことを覗いている様だ。

二十八歳になったさつきは、何か得体の知れない焦燥感に駆られる様になっていた。その焦燥感の正体が何なのか、さつきにはわからなかった。

高校を卒業し、大学に進学、そして、OLとなった。

振り返れば、さつきの周りには、いつも大勢の友人達がいた。華やかな人間関係がいつもそこにはあった。

だが、あれだけ笑いあい、はしゃぎあった友人達も、今はもう、さつきのもとはいない。

さつきは思う。もしかしたら彼女達は友達ではなかったのかもしれない。じゃあ、何だったの？私達は一度も本音なんて言ったことなかったって言うの？私も彼女達もお互いのことなんて何も知らなかったって言うの？

さつきの頬を一筋の涙が流れた。

本当の友達が欲しい、さつきはそんなことを思う様になっていた。信号が赤になり、彼女は車を止めた。

さつきは窓の外を眺めた。

すると、歩道の方で五、六人の若者達が何かを叫んで、固まっているのが見えた。

さつき

さつきは目を凝らした。

よく見ると五人の若者が一人の若者に対して、暴行を加えていたのだった。

さつきは暴行を加えられている若者の方を凝視した後、信号が青になるのを待ち、車を端に寄せて、停車した。

彼女は車を降りて、ゆっくりと若者達の方へ近づいていった。

「あなた達、何してるの？」

さつきは静かな口調で言った。

「何だ、お前！」

いきりたった一人の若者がさつきを睨みつけた。

「別に。何してるのかなあと思って」

さつきは静かに続けた。

「こいつが俺達にガンくれたんだよ！ふざけやがって！」

若者はいきりたったままそう言った。

「そんなことしてないよ。何もしてないよ」

先程からされるがままの若者は、泣き声でそう言った。

「何だか可哀想……。そうだ！」

さつきはそう言って、財布から一万円を取り出した。

「これでその子を助けてやってくれない？」

さつきはその一万円をそのいきりたった若者に差し出した。

「ふん、バカじゃねえの」

その若者は一万円をさつきから引きたくって、仲間と去って行った。

「ありがとうございました」

青年はホツとした様子でさつきに礼を言った。

「あら、いいのよ。行きましょう」

「え？」

「行きましょう」

「どこへですか？」

「いいから」

さつきは青年の腕を掴んで、車へ向かった。

青年を助手席に乗せ、さつきは再び車を走らせ始めた。

「あなた、名前何ていうの？」

「……。木之本一といいます」

「一ちゃんね……。私はさつき」

「……」

「さつきは大変だったわね……」

「ええ、本当に。ありがとうございました」

さつきは前を向いたまま、一に話し続けた。

「一ちゃん……」

「え？」

「私、あなたみたいな人好きなの……。さつきの連中みたいなのは嫌い。ああいう人達ってね、いつもああやっていきりたっているけど、あなたみたいにまともに普通に話すことなんて出来ないのよ」

「そうよ」

「……」

「あなた、年齢は？」

「二十一です」

「そう、ふふふ……」

一は半ば放心した様な状態で窓の外を流れていく景色を見つめていた。

この女性は一体何者なのか？何故、自分を助けたのか？一体、自分をどこへ連れて行く気なのか？様々な疑問が一の頭を駆け巡ったが、一にはこの状況に流されることしか出来なかった。

巨大なマンションの前で車は止まった。

「ここは？」

「私のマンションよ」

「……」

「行きましょう。コーヒーでもご馳走するわ」

さつきは一の手を取り、マンションの自分の部屋へと向かった。

一は何だか抵抗することも出来ず、ゆらゆらと彼女に連れられていった。

さつきは自分の部屋の前まで来ると、ドアを開けて、一を先に中へと入れた。

「どうぞ」

「はい」

一は半分夢見心地のような様子を見せて、中へすうっと入っていた。

さつきはその後に続き、中に入ってからドアの方を向き、両手ががちやりと大層にしつかりとドアを閉め、鍵を掛けた。

中は静かな、澄んだ空気が流れていて、この部屋を出入りしているのは彼女だけだということをおぼわせた。

彼女は一をリビングルームへと招き入れた。

薄いピンクのソファアールが三つ並んで置かれていて、その前にはガラス製のテーブルがあり、その少し前には小さめの液晶テレビが置かれてあった。

窓には、こちらも薄いピンクのカーテンが取り付けられていた。

床にも薄いピンクの絨毯が敷かれていた。

部屋全体はとても綺麗に整理整頓されており、それが逆に生活感というものを感じさせなかった。

「ささ、座ってちょうだい」

さつきは一にソファアールを指差した。

「はい」

言われるがままに一はソファアールに腰を下ろした。

さつきもすぐに隣にどっしりと座った。

「はああああー、疲れるわ。毎日毎日」

「……」

「OLなんて……」

「OLさんですか？」

「そう、下らない……」

「……」

「あなたは？仕事は？」

「大学生です……」

「そう、ふふ……」

一はうつむいて黙ってしまった。

さつきは両手を大きく広げて、ソファアの背もたれの上に乗せ、天井を見つめていた。

彼女は一の顎を片手で掴み、顔を覗き込んだ。

一は金縛りになった様に動けなくなった。

彼女は一の目を見つめ続けた。

一の顔は赤く変色していった。

さつきはそれを見届けると立ち上がった。

「コーヒー入れるわ」

そう言ってさつきはキッチンへと向かった。

さつきは鼻歌を歌いながらコーヒーを作りだした。

一はうつむいたまま動かない。

しばらくして、お盆にコーヒーを入れたマグカップを二つ乗せて

さつきは戻ってきた。

「お待たせー」

そう言って彼女はお盆をガラスのテーブルに載せ、ソファアに座った。

「飲んでちょうだいね」

さつきは一にコーヒーを勧め、自分の分のコーヒーを飲み始めた。

一もうつむいたまま、マグカップを手に取り、コーヒーを飲み始めた。

数秒後、一は意識を失い、床に崩れ落ちた。

「あら、もう効いたのね」

彼女はそう呟いた。

さつきは一のコーヒーに大量の睡眠導入剤を混入していた。

一が目覚めたのは翌日の昼だった。

目覚めた一の両手両足には手錠が掛けられていて、椅子に腰掛けられた状態で、ロープで何重にも巻かれ、完全に固定されていた。

一は驚き、しばらくジタバタともがいたが、やがて、どうするにも出来ない悟り、大人しくなった。

「私、ずっと寂しかったの……」

「……」

「今日からあなたの面倒は私が見るわ……」

「……」

「食事もちゃんと作って食べさせてあげる」

「……」

「お風呂にも毎日入れてあげるわ」

「……」

「トイレのことも心配しないで」

「……」

「ちゃんとするから……」

「……」

一の目はみるみる驚愕と恐怖の色を帯びていった。

一は再び、大きく体を動かし、もがきだした。

「ちゃん……。よろしく……」

さつきはじつととりとした目で一を見つめてそう呟いた。

さつき

(後書き)

読んで頂いてありがとうございます。
ご感想、ご批評等頂ければ嬉しいです。

さつき

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0287e/>

さつき

2009年3月24日08時49分発行